

# 「学級内比較」による教師の力量形成の可能性

## —映像記録を活用した授業研究法の開発—

笹屋 孝 允<sup>1</sup>

Teachers Developments by an intra-class Evaluation.: Methods with Movie Data

Takayoshi SASAYA

### 要 旨

子どもたちの成長を正確に分析する技能の習得は、教師の専門性の発達につながる。そこで、子どもたちの成長を分析する技能の習得を目指した講座を開発した。同一学級の授業について、数か月の期間が開いた授業映像を見比べ、子どもたちの成長について感じたことを教師間で討議する研修講座である。

講座のアンケート結果から、このような「学級内比較」を通じた授業研究が、子どもたちの成長を分析することの技能の習得と、自身の授業の映像記録をとることの動機づけにつながることを示された。

キーワード：授業研究、映像比較、子どもの成長、教師の専門性、研修

### 1. 問題と目的

授業研究では、子どもの成長を正確に分析し、評価することが重要である。その評価が、以後の授業の質の向上につながる形成的評価となるためである。子どもの成長は授業研究の成果でもあり、成長を分析することが、授業研究の評価とも言える。また、成長していない事実があるのであれば、それが今後の授業研究の課題となるため、その事実を正確に分析することも重要である。

子どもの成長を分析できるようになることは、教師の専門性の発達とも言える。子どもたちがいかに成長するのか、その視点を持っていることで教師は子どもたちの成長に必要な支援が可能となる（ダーリング-ハモンドら, 2009）。1つ1つの授業について、子どもたちがどのように成長するのか、どのような成長を期待するのか、あらかじめ持つておくことが重要であり、そこでの成長について教師が知っておくことで、質の高い授業が展開できる。子どもたちの成長を正確に分析し評価できることが、「いかに教えるか」の実践的知識を構成すると考えられる。

教師の専門性の発達には省察が必要である。子どもたちの成長の分析が、省察の1つとなる。子どもたちの成長に自身の授業実践がどのように貢献したのか、そのことの省察が教師の専門性の発達につながる。子どもたちの成長を分析することは、教師の専門性を発

達させる省察の1つの活動であると考えられる。子どもたちの日々の小さな成長も、それを長期的に継続すれば成長は大きなものとなる。子どもたちの日々の成長を分析する省察が重要となる。

子どもたちの成長を分析するには、同じ子どもたちを継続的に観察する必要がある。つまり、対象となる個人が特定されその個人が前後でどのように成長したのかを評価する「個人内評価」と同じように、同じ学級集団の前後を比較し子どもたちの成長を評価する「学級内比較」が、子どもたちの成長の分析には必要である。「学級内比較」を実現する授業研究法を開発することで、教師が子どもたちの成長を正確に分析できるようになり、教師の専門性を発達させることができると期待される。

しかし、様々な原因により、子どもたちの成長を分析することは困難である。まず、授業を実践しながらの子どもたちの成長の分析そのものが困難である。評価を行いながらの授業の展開は難しく、評価の時間は授業の事前、事後に限られる。授業をただ実践しているだけでは、評価の技能習得の機会すなわち子どもたちの成長を分析する技能の習得とはならず、「行為の中の省察」(Schön, 1983)を行う必要がある。しかし、「行為の中の省察」は難易度が高い。また、子どもたちの成長は、時間や日ごとの単位で見れば小さなものであるためである。そのため、毎日子どもたちと接する教師にとっては、子どもたちの成長として分析できる結果

<sup>1</sup> 三重大学教職大学院

は小さなものである。そのため、長期的に見れば大きな成長も、教師は日々の授業での子どもたちの成長を看過してしまう。

さらに、授業の事前、事後で評価の機会を設定することが、時間的制約で難しいことである。成長を分析するには、実践の前後で子どもたちを評価する必要があるが、日々の教育実践について前後の評価の機会を設定することは、現状の勤務時間内に行うことは不可能である。

これらに加えて、授業の事前、事後で評価の資料を保存しておくことが困難である。時間的制約が許される時期にまとめて長期的な子どもたちの成長を分析するとしても、前後で子どもたちを評価できる資料が必要である。それには子どもたちの書いたものなどの記録に偏り、授業の中で子どもたちがどのように活動していたのかの記録ではない。授業中の子どもたちの活動を、長期的な成長を分析するために必要な記録を残しておく必要があるが、その保存が難しい。

教師にとって子どもたちの成長を分析することが困難であるため、教師がその分析の技能を習得することは困難である。教師が子どもたちの成長を分析する実体験ができる環境を構築することがまずは必要である。

研究授業での公開授業を参観することが、子どもたちの成長の分析を実体験する1つの機会となる。公開授業の参観であれば、難易度の高い「行為の中の省察」を行わずに、子どもたちの成長を分析できるためである。しかし、研究授業で公開授業を1年間で複数回実施する学級は、研究授業を特に盛んに実施している学校でない限り行われたい。そのため、事前事後を比較しての子どもたちの成長の分析、すなわち「学級内比較」ができない。

また、もし複数回公開授業を参観することができたとしても、前の時の授業の様子を、正確に記憶し続けることはできない。記録を残しておく必要があるが、詳細な記録は授業者である教師にしかできないことである。

その解決策として期待されるのが、授業の映像記録の活用である。固定カメラで記録が可能であるならば、授業前に設置しておくだけでよく、簡単に記録ができる。また、ハードディスクの大容量化が進んだ現在では、映像記録の長期の保存もできる。映像記録により、自身が授業者となった授業についての省察ができる。映像記録を活用した授業研究は、客観性が担保される三人称的な分析を可能とする再生刺激法に適しており、教材内容と生徒についての複合的知識を豊かにする(吉崎, 2016)。

授業映像の記録は、教員を対象とした研修でもすでに活用されている。例えば、優れた授業と評価される授業映像をホームページに掲載し、教員がネットワー

ク環境を活用してその授業映像を閲覧し、優れているとされる指導技術を学ぶ研修を設定している教育委員会もある。

それ以外にも、授業映像を活用した授業研究法が開発されている。代表的な例が「ストップモーション方式」や「VTR 中断法」である(吉崎, 2017)。ストップモーション方式(藤岡, 1991)とは、録画した授業映像を見ながら、ある時点で映像を一時停止し、参加者が自由に発言したり議論したりする授業研究法であり、具体的な授業場面に即した教材の活用方法や教授方法、生徒についての複合的知識を豊かにすることを目指している。また、VTR 中断法(吉崎, 1991)も同様に録画した授業映像を見ながらある時点で映像を一時停止し、「もしあなたがこの授業者であったら、次にどのような教授行動をとるつもりですか」という質問に答える形で教授行動の意思決定とその理由を考察する授業研究法であり、授業者だけでなく参加者も教材内容と教授方法との複合的知識を豊かにすることを目指している。

いずれも、授業中の教師の実践について、授業者も参観者も、文脈に即した教授方法の考察を目指すとともに、その実践の意図など授業者のみならず参加者も自己の考え方を省察することを促すことが目指されている。教師の省察を促し、教師の専門性を発達させることに、授業映像の記録の活用が貢献できる。

しかし、授業の映像記録を行う教師は多くはない。その原因もいくつか考えられる。まず、映像記録を行っておく必要性を教師が感じていないためである。これは、映像を活用した授業研究法について教師が知っていないためであると考えられる。また、研究法を知っていても、自身で実際に授業研究を行わないとその効果を経験できないためであるとも考えられる。

また、「記録する授業は、優れたとされる指導技術を記録しておくため」という教師の先入観も、その原因の1つである。そのため、自身の授業実践での指導方法を研究し、それを対外的に公開することを目標としない教師は、授業の映像記録を行う必要性を感じないのである。

さらに、授業映像の分析方法が理解できていない場合も、授業映像を記録することに必要性を感じない原因の1つとなる。この場合、映像記録を活用することができず、記録が保存され蓄積されていくことに終始する。記録を蓄積しても、限られた時間の中で、効果的に分析の機会を設定できる環境整備が必要である。

つまり、授業の映像記録を活用した子どもたちの成長の分析を行うためには、教師が授業の映像記録を撮っておくことの動機づけと、映像記録を見ながら子どもたちの成長の分析方法を習得することが課題となる。研修でそれを達成するためには、映像記録を撮ってお

くことの重要性を説明し、映像記録を見ながら子どもたちの成長を分析する方法を紹介することの2点を、同時に展開することが必要となる。

## 2. 研修プログラムの開発

そこで、これら2点を同時に展開することを目標とした、研修プログラムを開発することとした。目標は、子どもの成長を分析し評価する技能の習得である。まずは、自分の授業、所属校の授業ではない映像記録から子どもの成長を分析することを体験し、これら2つの目標達成を目指すこととした。

開発した研修プログラムは、三重大学教職大学院が三重県教育委員会との連携事業の一環で行っている、教職2～3年目研修の1講座として開講することとした。そして、その講座は筆者が担当することとした。

講座を設定するにあたり、まず初めに授業の映像記録を探索した。研究授業の映像記録が残されている学校のうち、1年間で2回以上研究授業を行っている学級を探した。そこで、6月と翌年2月に研究授業を行った小学校5年生学級を発見した。授業者である学級担任の先生と校長先生に講座の趣旨を説明し、講座での映像記録の利用について承認を得た。なお、プライバシーに配慮し、実際の研修プログラムの中では研究授業を行った学校名は明らかにせず、また、個人情報の配慮についての参加者に説明を行い、理解を求めた。

授業映像については事前に、講座を担当する筆者と、県教育委員会の研修担当の研修主事の先生とで内容を確認した。45分間の授業のうち、どの部分の映像を見比べるのかを協議し、決定した。この時、6月と2月の間で子どもたちの変化が見えやすい部分として、グループ学習の場面の様子と、その後の全体指導の場面の2場面について、それぞれ6月と2月の映像を比べて見ることにした。

子どもたちの成長を分析するには、2点間で子どもたちの様子を比較し、何が変わったのか(また、何が変わっていないのか)を分析しながら授業映像を見ることになる。その際、観点を絞らずに探索的に成長の観点を探して拡散的な思考を促す見方と、観点を絞りその成長について焦点化した思考を促す見方の、2つの方法が可能である。

前者のように、観点を絞らずに映像での子どもたちの様子を幅広く見ることで、子どもたちの様子について参加者は多様な解釈ができる。また、授業映像を見た後に、教師同士で解釈を交流すれば、自分と異なる解釈を発見し、1つの授業について新たな意味を見つけることができる。1つの授業について多義的な発見が可能であるという解釈多様性に気づく。解釈多様性に気

づくことで、教師の授業研究への動機づけの向上が期待される(佐伯ら, 2018)。

また、観点を絞り、授業映像を見た後の討議の内容を焦点化することで、授業研究が研究として深まる。1つの成長の観点について、それを分析する技能を習得することに適していると考えられる。討議が焦点化されることで教師たちの協同的な課題解決や課題探究が行われ、成長の分析の技能習得のみならず、教師の同僚性向上も期待できる(鹿毛ら, 2017)。もし、個人で行う授業研究となっても、分析の焦点化は個人の研究テーマの追究が行いやすいと考えられる。

これら2種類の見方で、教師たちが子どもたちの成長を分析し討議できるよう、3時間の研修プログラムを計画した。そのために、1つの授業映像を20分間ずつ、6月と2月とで見比べることにした。講座の前半では、分析の観点を様々に発想できるよう、観点を設定せずに映像を見ることにした。講座の後半では、焦点化した討議ができるよう、観点を設定して授業映像を見ることにした。観点は、授業映像を提供した小学校の研究主題として設定されていた「ペア・グループ学習」での子どもたちの話し方聞き方、と設定した。

子どもたちの成長を見ることの重要性の解説と、これらの授業映像の見方について、合わせて講座の冒頭10分間ほどで説明することとした。

講座の前半と後半で、成長の分析の観点の設定の有無はあったが、見る授業映像は同一のものとした。同じ授業映像をくり返し見ることで、分析を深めたり、見落としていた部分があったことに受講者が気づいたりすることを期待した。合わせて、同じ授業映像をくり返し見ることの重要性を受講者が体験し、その重要性を理解することを期待した。

授業映像は、授業中の教室全体を見ることができるよう、教室前方から子どもたちの顔の表情が見えるように設置されたビデオカメラで撮影されているものを使用した。講座では受講者が映像の細かい部分まで見られるよう、プロジェクターで教室のスクリーンに投影し、音声も講座を行う教室設置のスピーカーから出力するようにした。授業映像を見る際は、普段の研究授業を参観する時と同様にメモを取りながら見るように指示をした。実際に、全員の受講者がメモを取りながら授業映像を見ていた。

グループ討議では、3～4人で1グループとなるように編成した。3～4人の人数が、グループ内での発言機会が十分に確保され、また、複数の種類の成長の見方が出されるのに、過多でも過少でもない人数であると予想されたためである。

全体での意見交流では、個人の意見と合わせ、グループ内で出た意見を紹介することとし、グループ間で

の意見交流のための時間とした。講座の最後には、教師の専門性を高めることと子どもの成長を分析する技能との関連を筆者が説明するとともに、講座内容についての質疑応答、アンケート記入の時間とした。

ておくことの動機づけを高められると考えられる。次節ではその成果を検証する。

### 3. 結果

表 講座で設計した研修プログラム時程

時間 (分)	内 容
10	講座の趣旨説明、活動の内容説明
40	6月と2月の授業映像、20分間ずつ見る
25	グループでの意見交流 成長分析の観点を設定せず
10	全体での意見交流
	(休憩)
5	後半の活動内容説明
40	6月と2月の授業映像、20分間ずつ見る (前半と同じ)
25	グループでの意見交流 成長分析の観点を「ペア・グループ学習」 での子どもたちの話し方聞き方」と設定
10	全体での意見交流
15	講座の総括、質疑応答

講座の受講者は、正規採用となってから2～3年目の教職経験を持った教員30名であり、勤務する校種は小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の4種であった。教職大学院生5名(小・中・高等学校の現職教員)も一緒に参加し、グループや全体での意見交流にも参加した。

講座の前半での意見交流では、「どの子どもも意欲的に授業に参加するようになった」、「教師の指示を待たずに学習を進められるようになった」などの意見が出された。記録を活用して子どもの成長を見ることの大切さを、受講生が実感したようであった。

講座の後半の意見交流では、「グループで話し合っている内容が具体的になった」、「グループ内の意見を比べながら聞いている」、などの意見が出された。研究授業の事後協議会で目標とされる研究主題の探究における、観点を絞って議論することの意義や成果について実感したようであった。

これらの講座を通し、授業の映像記録をもとに子どもの成長の分析を実体験し、その技能を習得すること、その結果として受講者が自分の授業の映像記録を撮っ

講座の受講者の感想は以下の通りであった。一部抜粋である。

・映像記録を2回、3回撮って見比べることで、子どもの成長が見えるということを知りました。また、「観点」をしばって見返すことで、テーマに合った話し合い、気づきができるということもわかりました。来週早速撮り、夏休みにじっくり研究したいと思いました。

・現状を知るだけでなく、現状の記録として残しておくことで今後の改善などに活かせることを知り、子どもたちの様子や行動などを残していきたいと思う。また、その記録を見返し、積極的に今後の授業改善につなげたい。

・子どもの変化に着目した参観(記録)はすごく神経を使ったように感じました。教師の発問やはたらきかけに注視してみることは、実は楽しんでいたのかもしれないと反省しました。子どもの成長をもとに教師のはたらきかけがどうだったか評価する必要があると思いました。

・授業研究、研究授業の時に、どういう視点でどのように見れば良かったのが今まで全く分からず、校内研修を通じて様々なことを勉強しているが、いまいち身に付かなかった。しかし、今日の授業を通じて、教師が持つべき視点や観点がわかった。これから校内での研究授業もたくさんあり、その時に今日のような視点をもって参観したい。

・実際に映像を見比べることで、生徒たちの成長をより明確に見ることができた。普段、なかなか映像で記録を残すことがないが、試してみようと思った。生徒が成長するために、私も教師として、たくさんのことを学んで成長していく必要があると改めて感じた。すべての生徒のスタートとゴールが同じではないので、一人ひとりに目を向けて、個人のスタート、そしてどこまでできるようになったのか(成長)をきちんと把握していくことを心がけたい。変わっていないことを課題としてアプローチの仕方を考えていく。また、ペア・グループに注目することで、メリット・デメリットを改めて整理することができた。ペアやグループも取り入れながら、今後も生徒たちを成長させられるような授業を作りたい。

・2～3年次研修の中にも、公開授業があります。どんな観点でどんな授業をしたらよいか不安でしたが、今回の研修でよくわかりました。公開授業の1時間だけを見て完結させるのではなく、それよりも前の点を見て、成長を見つける、変わらない課題を見つける。私も秋に校内の公開授業を控えているので、やってみたいと思います。ただ、2点を比べる方法はまだ周りの先生も気付いていない方法だと思うので、どんどん伝えていきたいと

思います。また、漠然と授業を見るのではなく、テーマを絞って見ると、たくさんのことがわかり、理解が深まったので、テーマごとに何度も見返したいと思います。そのために、積極的に記録を残していこうと思います。

- ・研究授業というといつも身構えてしまうが、数か月のスパンでどれだけ成長しているか(成果)何を鍛えればいいのか(課題)と分けることで視点が絞れ、また物事を「比べる」「比較する」大切さがわかった。
- ・校内授業で、公開授業を行ったり、協議会をしたりするときに、見方というのは教えてもらうのですが、今回教えていただいたのは、1つのところに軸を決めたり、成長を見たりするという、新たな見方だったので、面白かったです。
- ・授業研究での注目ポイント、グループへの関わり方など勉強になりました。つい「できないこと」に目が行きがちですが、「できるようになったこと」「変わらないこと」という視点でクラスを見てみたいです。
- ・自らの授業を記録することによって2点間による生徒の成長を見ることができるといことがとても新鮮でした。成長を見つけるためにも記録をしてみたいと思いました。
- ・生徒の様子を記録して、成長を考えるというやり方は今まで全く意識したことのないことだったので、新鮮でした。実際の小学校の授業の様子を見せていただき、「成長」を考えることを体験できよかったです。
- ・初任研では記録(映像ではないですが)を活用して、自分の授業の振り返りたいと思った。自分の勤務する学校では公開授業週間が設けられているので、生徒に合ったアプローチは何かを考えながら、授業を行いたいと思った。映像を見返してみることで、初めて気づくことも多かったので、自分の授業研究にも取り入れていきたい。
- ・授業研究を通して、生徒がどのように成長したかを分析し、次の授業に活用していきたい。生徒の成長の様子を知っておくことで、一人ひとりの成長に合わせた指導方法を選択することができる。映像で残しておき、見比べることで、見えてくるものがあり、ぜひ活用していきたいと感じた。
- ・記録をとり、見返すことの大事さを感じました。昨年の初任研で授業研のビデオ提案がとても大事だったことを確認しました。昨年したことを思い出して、今後もやっていきたいです。児童の成長を見る(感じる)ことも大事にしたいです。
- ・特支なので、今日の小学校での授業とはまた異なっていて、同じようにはいかないけれど、特支での活用の仕方、子どもたちにとって必要なことを授業記録にとり、探して、学習に活かしたいです。いつも自分が困っていた部分を、今回教えていただけて勉強になりました。
- ・授業を「比べる」ことで知れることの大きさを感じることができました。毎日、児童と一緒にいると気付くことのできない「変化」、子どもたちを成長させるためには、どのように授業を改善していったらいいのかを考えなければならないのだと思いました。
- ・研究授業と聞くと、大変そう・・・と漠然と思ってしまい、なかなか取り組めていなかった。今日の講義を聞いて、子どもの成長を見るためには、研究授業が重要だと感じた。たかく構えず、とにかくまずは映像記録に残して、比べてみたい。子どもの課題と成長を見つれるところから始めたいと思う。
- ・研究授業という、これまで研修担当の先生から言われてなんとなくやるという感覚でいましたが、授業研究として映像記録を撮り、自分自身で見比べてみるのなら、私にも、いつでもできるかなと考えることができました。子どもたちの発言や表情を比べることで、どのような効果があったのかを見ることができると知ることができました。
- ・映像記録はすぐに始められることなので、実施しようと思いました。まず記録を残していきます。
- ・映像の記録を定期的にとっていきなりたいと思いました。授業中には気が付かなかった子どもの姿を見ることができし、比べることで子どもの成長をとらえることができるということがわかりました。

また、講座に参加した教職大学院生(現職教員)の感想は以下の通りであった。一部抜粋である。

・まず、授業研究の方法について、2回の授業を「比べて見る」ことで変化がよくわかった。私は、ペアやグループ学習に興味があったので、1回目に見た時もそこを中心に見ていた。1つの授業を見て、それについて検討するときに、視点がいろいろあって多くのことに気づけるといういい面もある。ただ、研修テーマや学校教育目標を深めていこうと思うと、観点を絞ることは大切だと思った。2回目のグループ討議では、話が繋がったり深まったりすることができ、自分の考えを再構築できたように思う。これは、子どもたちのグループ学習でも同じで、そのような深まりのあるものになれば意味がないと改めて感じた。6月から2月への変化について4点あげる。①意見を言い合うだけのペア学習で、1分間で話がつかってしまうペアが多い。→2月は、友だちの意見

を聞いて、共有したり、さらに考えているような様子があったので、時間いっぱい話ができていた様子だった。②グループになることで、かえって意見が言えない子がいた。→グループになることで、自分の意見や考えに反応があり、安心感が持てている様子があった。それは、体の向きであったり、身を乗り出したりだとか、教科書を一緒に見るだとか行動にも表れている。友だちとの距離が近くなった。③ペア学習やグループ学習後の発言が似ているものが多い。→発言が増えている。仲間の意見に共感したり、さらに考えたりしているので、授業内容も深まっていると感じた。また、発表した子の意見を教師が板書しているときに、同じグループの仲間がじっと見ていた。その子の意見ではなく、そのグループの意見になっている証拠だと思った。④教師の声かけは「隣と話してみて」「グループになって」のようにペアかグループかの指示をしている。→「話しよか」の言葉で、自主的にグループになり、周りの子たちと自由に意見を聴き合っていた。積極的にかわりを持とうとする姿が見られた。ペアやグループ学習の経験を積んで、よりよい状態になってきている。

・「授業を比べて見る」という大切さ、事実を書き出すだけでなく、筋を通してみることで新しい発見があるというも学ばせていただきました。筋を色々変えていくことで、1つの授業から色んなことが学べそうです。ビデオを撮ったあと、自分だけが鑑賞して終わりではなく、半年後、一年後に生徒に見せて還元する方法も面白い、とグループの話し合いの中で出ました。グループディスカッションも、自分では見れていなかった意見がでるととても参考になりました。

・これはすぐにもって帰って研修が可能だなぁと思いました。そもそも子どもにも成長があるというときには、必ず時間的な長さが必要です。一方研修はその日だけで終わってしまった場合は点であり、そのつながりはわかりません。また同じ教室を1カ月ごとに見ていったとしても、1カ月も間が空いてしまえば、授業を見た方も、なんとなくの思いでしか生徒を見ることが出来ず、結局研究できません。今回同じクラスの7ヶ月後を2時間の間で見ることが出来たのは、ビデオならではだと思えます。また同様に、「目の付け所」を自分なりに考えて、考える前と同じ授業を見るというのは自分の中で見え方が違うことが実感でき、「この研修は有意義だった」という実感を得やすいと思います。となく現場では研修は当事者以外は1回限りのイベントになってしまいがちです。しかし本来教育とはつながりをこそ大切にしているのだと思います(先生が冒頭説明してくださったとおりです)。今回自分も実感できましたし、現任校にも持って帰り、不評だったビデオ研のやり方をさっそく変えるよう提案してみたいと思います。もちろん自分自身の記録もとっていきたくと思っています。

・これまでは年一回の公開授業のときに授業を見るぐらいで、授業の見方がわからなかったです。今回の研修で、航海するときの羅針盤のように授業の見方がわかりました。子どもの成長をみるため2点間でくらべることで全体をみているとぼやっとしています。焦点(テーマ、目標)をあててみると、不思議なことに子どもたちの変化や教師の動きがよく見えました。グループやペアで人の意見を聞いたり、意見を言ったりすることで考えが深くなったり、後に発表するときの練習になっていたり、自信になったり、安心感になったり、グループやペアの効果もよくわかりました。個人的には奥に座っていた小さい男の子が最後身振り手振りで話している姿に感動しました。途中の教師がしてきたことや子どもたちの成長の理由も知りたいです。

・授業研究については、「比較」してみると、客観的に子どもの変化(変化がない場合も含めて)がわかります。ですので、現場に帰ったら、授業をお互いに見せ合うというのも取り入れていきたいと思っています。また、若手教員の方にも、それを伝えます。

・まず、授業を2点間で見るという発想が自分にはなかったもので、とても新鮮でした。同じ教室でも時期の違う2つの授業を見ることで、明らかな子どもの変化に気づくことができましたし、教室に流れる雰囲気の違いを感じ取ることができました。1回の授業の中から子どもの成長を見取るのはなかなか難しいですが、2点間で授業を見比べていくことでこれほどまでに子どもの変化がわかるものかと驚きました。校内研修の授業研究等においては、普段の様子をほとんど知らない状態で授業を見ることになるので子どもの変化を感じ取るのは難しいですが、今回のように2点間で授業を見ることで変化がわかりやすくなると思います。職員が各々授業を記録(録画)する習慣をつけておけば、さほど難しくはないと思いますし、研修担当の学級を例にして、こういう研修の仕方もあるよと職員に提案するのも一つかなと思います。そうして子どもの変化を見る力を養うことで、2点間ではなくても1回の授業の中で子どもの成長や変化を感じ取ることができるようになるのかなと思いました。自分自身「授業の見方」を学修テーマにしているものの、「授業が見える」とはどういうことかはっきりともっていませんでした。「授業が見える」とは「子どもの成長がわかること」と教えていただいて、自分の中に新たな考え方を得ることができました。今の教育の流れである主体的・対話的で深い学びの中で子どもたちがどのような成長をしているのかを教師が見られるようになることが大切なのではないかと学ばせていただきました。貴重な勉強の機会を与えてくださり、ありがとうございました。

受講者及び講座に参加した教職大学院生からのアンケート結果から、授業での子どもたちの成長を分析することの重要性を体験できたことがうかがえる（下線部（波線））。また、今回の研修プログラムが、受講者自身の授業の映像記録をとることの動機づけにつながったことも、アンケート結果から解釈される（下線部（直線））。

#### 4. 総合考察

今回、教師の専門性を発達させることにつながる、子どもたちの成長を分析する技能の習得を目指した講座を開発した。同一学級の授業について、数か月の期間が開いた授業映像を見比べ、子どもたちの成長について感じたことを教師間で討議する研修講座である。講座のアンケート結果から、このような「学級内比較」を通した授業研究が、子どもたちの成長を分析することの技能の習得と、自身の授業の映像記録をとることの動機づけにつながることが示された。

今回の研修講座と同様の授業研究は、授業の映像記録をとっておくだけで可能なため、個人でも実施可能な授業研究である。もちろん協同行う授業研究の方が解釈多様性の発見につながるが、複数の教師が同時に参加することが難しい状況でも授業研究が可能となる利点がある。

中学校や高等学校にて複数の教師が協同行う授業研究を行う際にも、今回の講座で開発した授業研究法は活用される。教科担任制を採用する中学校や高等学校では、教科を越えてお互いに授業研究の目的を共有できるような授業研究の方法が求められる。子どもたちの成長は、教科を越えて分析することが可能である。資料活用の技能など教科特有の成長や、文章表現力など教科を問わない子どもの成長の、両方を分析することができる。教科を越えて実施できることから、中学校や高等学校で教科を越えた参加者を期待できる授業研究法と言える。

特に、授業を実践している教師であれば、今回の講座よりも容易に成長を分析できる。授業の映像記録を撮っておき、しばらく時間が経過してから授業映像を見返して現状と比較すれば、学級内比較が達成されるためである。つまり、映像記録が実践前、現状が実践後となり、そこでの2点間の比較が可能である。もちろん、映像で2点間を比較することで分析がより詳細にできるが、授業を担当している教師ならば2点間の学級内比較のためには必ずしもその必要はない。

今後の課題として、まず、今回開発された授業研究法が、自身の授業映像を活用した場合に、その教師の成長にどのようにつながるかの検討である。自身が授業者となった授業を複数見比べることで教師自身の成

長を実感できるのか、また、過去の授業映像を見返すだけで2点間の比較が実際にできるのか、それぞれ検討していく必要がある。

また、今回開発された授業研究法が、校内研修でどのように活用できるかの検証も必要である。校内のある1学級の授業映像を見比べる場合、討議は二人称的な内容となる。また、過去に授業を担当したことのあつた教師は、当時と現状とを比較することもできる。校内でこのような授業研究を展開した場合、参加者が当事者意識を持ち、個人の背景などを追いながら成長を分析する技能の習得につながることが期待される。その検証が必要である。

#### 参考文献

- L・ダーリング-ハモンド, J・バラツツ-スノーデン (秋田喜代美・藤田慶子 (訳)) (2009) 『よい教師をすべての教室へ 専門職としての教師に必須の知識とその習得』 新曜社.
- 藤岡信勝 (1991) 『ストップモーション方式による授業研究の方法』 学事出版.
- 鹿毛雅治, 藤本和久 (編著) (2017) 『「授業研究」を創る教師が学びあう学校を実現するために』 教育出版.
- 佐伯胖, 刑部育子, 荻宿俊文 (2018) 『ビデオによるリフレクション入門: 実践の多義創発性を拓く』 東京大学出版会.
- Schön, D. A. (1983) *The reflective practitioner: How professionals think in action*. Basic Books. ドナルド A. ショーン (著) 柳沢昌一・三輪健二 (監訳) (2007) 『省察的実践とは何か』 鳳書房.
- 吉崎静夫 (1991) 『教師の意思決定と授業研究』 ぎょうせい.
- 吉崎静夫 (2016) わが国で開発された授業研究法の特徴と意義. 日本女子大学教職教育開発センター年報, 2, pp.7-15.
- 吉崎静夫 (2017) わが国で開発された授業研究法の特徴と意義 (2). 日本女子大学教職教育開発センター年報, 3, pp.7-14.

#### 謝辞

研修プログラムの開発にあたり、授業映像の提供を許可していただいた授業者の学級担任の先生、および校長先生に御礼申し上げます。

また、研修の実施に当たり、2～3年目研修をご担当いただいた三重県教育委員会の研修主事の先生にお世話になりました。また、受講者の皆様から、私もたくさん学ばせていただきました。ありがとうございました。